

実践校に関する事項		
学校区分	学校名	学校長名
小学校	白浜町立安宅小学校	嶋田 正好
学校所在地		
(〒 6 4 9 - 2 5 2 4) 和歌山県西牟婁郡安宅 2 1 7 Tel 0739 (52) 2047 fax 0739 (52) 4097		
担当者名	役職名・担当教科	
村上優樹	5・6年担任	
<p>〔学校の概要〕 安宅地区には弥生式土器が出土した安宅遺跡がある。時代が上って南北朝時代には、熊野木軍で有名な安宅氏がこの地を根拠地とし、本城の他に北側に八幡山城、南側に勝山城を築くなど権勢を誇っていたといわれている。本校は、本城のあった地に建てられ、昭和53年(1978年)に現在の校舎に改築された。「水に輪をかく川波の広く豊かなその思い心にもってむつまじく・・・」と校歌にも藻われている日置川下流の左岸部に位置し、平野部は東西・南北に各1.5kmのデルタ状の地形で西方に開けている。校区は安宅地区と矢田地区の一部(日置川の左岸側)からなるが面積は小さく、児童の通学距離は全て1km以内におさまっている(現在、矢田地区の児童は無い)。また、川を2km程下れば太平洋があるなど自然環境に恵まれている。学校の創立は明治12年(1879年)で現在まで146年が経過し、その歴史には地域住民の生活の歴史が深く刻まれている。児童数は過疎化や少子化等の影響で徐々に減少し、令和7年度は、全校児童 21名である。</p>		
研究実践に関する事項		
対象者児童・生徒	学習支援者等(延人数)	主な活動場所
学年1～6年生 21名	職員9名	校内
実践研究テーマ		
熊野古道体験を通して地域文化とその価値を学ぶ。		
実践教科等名	単元名	
総合	熊野古道体験学習	
〔キーワード〕 世界遺産・プログラミング		
<p>〔単元目標〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・熊野古道を実際に歩き、見て、感じる体験を通して、自然環境や歴史的背景、人々の思いや願いについて理解し、地域に受け継がれてきた文化の大切さを考えることができる。 ・熊野古道の自然の中での体験を通して、人と自然が長い時間をかけて共に生きてきたことに気づき、自然を大切にしながら文化を守ることを考えることができる。 		
<p>〔学習に当たった全学習時間数(世界遺産学習に関わる時間数及び 学習活動名/教材名)〕</p> <p>全体 6時間 (「熊野古道を歩くことを体験しよう。」 3時間)</p>		
<p>〔地域および文化財管理者等との連携の実施状況〕</p> <p>① 和歌山県世界遺産センター・・・次世代育成事業(世界遺産事前学習)</p>		

実践校に関する事項			
〔单元指導計画概要〕			
	主な学習活動	学習への支援	評価方法等
1	世界遺産についての事前学習	事前学習として世界遺産センターの職員より土地の信仰や自然保護についての講義を受け、世界遺産の概要をつかむことができた。	学習態度、発言など
2	熊野古道体験学習(青岸渡寺・那智の滝)	世界遺産センター職員や語り部の方との交流を通して、熊野古道について理解を深めた。	発言
3	プログラミング学習	ソツログというアプリを使い、作っていたプログラムに新しく編集を加えた。	成果物
4			
5			
〔单元学習の成果と課題〕			
<p>成果 本学習では、熊野古道を実際に歩く体験を通して、世界遺産としての価値や熊野信仰、自然と人間の関わりについて理解を深めることができた。教室での学習に比べ、現地で自然環境や史跡に直接触れることで、児童は高い関心と意欲をもって活動に取り組む姿が見られた。また、長距離を歩く体験を通して、困難に直面した際に仲間と励まし合い、協力して行動する態度が育まれた点も大きな成果である。体験後の振り返りでは、「自分の足で歩くことで、昔の人々の苦労を実感できた」「世界遺産を守る必要性を考えるようになった」といった記述が多く見られ、主体的な学びにつながったことがうかがえる。</p> <p>課題 一方で、体験そのものの印象が強く、学習内容が感想中心にとどまってしまう生徒も見られた。世界遺産としての価値や保全の意義について、十分に言語化・整理できていない点が課題として挙げられる。また、事前学習と体験活動との結びつきが必ずしも十分ではなく、現地での気づきを体系的な理解へと発展させる工夫が必要である。さらに、記録や資料の活用方法に個人差があり、学びの深まりに差が生じた点も今後の改善点である。 今後は、体験活動の目的や観点をより明確に示すとともに、事後の振り返りや発表活動を充実させることで、体験を確かな学びへとつなげていく必要がある。</p>			
〔世界遺産学習の効果〕			
<p>世界遺産学習を通して、児童は熊野古道が持つ歴史的・文化的価値や、自然と信仰が深く結びついた地域の特色について理解を深めることができた。教室での学習に加え、実際に現地を訪れ、五感を通して学ぶ体験は、知識を実感を伴った理解へと高める効果があった。また、世界遺産が多くの人々の努力によって守られてきたことを知ることで、文化財保護や環境保全に対する意識が高まった。単に「見る」「知る」学習にとどまらず、「守り、継承していく」という視点を持つきっかけとなった点は、大きな効果である。さらに、熊野古道を歩く体験を通して、昔の人々の思いや巡礼の意味を身体的に理解することができ、歴史を自分事として捉える姿勢が育まれた。困難な道りを仲間と共に乗り越える中で、協力する態度や忍耐力、達成感を味わう機会ともなった。このように、世界遺産学習は、知識の習得に加え、思考力や態度面の成長を促し、児童の主体的な学びを引き出す有効な学習活動であるといえる。</p>			
〔世界遺産学習の今後の方向性及び改善点について〕			
<p>今回の世界遺産学習では、熊野古道を実際に歩く体験を通して、歴史的価値や文化的背景、自然環境との関わりについて理解を深めることができた。一方で、感想中心の学びにとどまってしまう課題も見られた。今後の方向性としては、事前・事後学習の充実が重要である。事前学習では、世界遺産として登録された理由や熊野信仰の特徴、保全活動の現状などを調べ、課題意識をもって体験に臨ませる必要がある。これにより、現地での気づきが一過性の感動に終わらず、学習内容として定着すると考えられる。また、事後学習においては、体験を振り返りながら「なぜ世界遺産として守られているのか」「今後どのように継承していくべきか」といった問いについて話し合いやレポート作成を行うことで、思考を深める活動が有効である。個人の感想にとどまらず、他者の意見に触れる機会を設けることで、多角的な視点を育てることができる。改善点としては、体験活動中の学習の焦点化が挙げられる。あらかじめ観察の視点や記録項目を示すことで、生徒は目的意識をもって活動に取り組むことができる。また、地域の方やガイドとの交流を取り入れることで、教科書では学べない生きた知識を得られる点も今後の課題として検討したい。今後の世界遺産学習では、体験・調査・表現を一体化させた学習構成を行い、世界遺産を「見るもの」から「守り、次世代へ伝えるもの」として捉える意識を育成していくことが重要である。</p>			

様式 2

令和 7 年度 「次世代育成事業」における学習記録

[概要報告書 学習記録・活動写真]

